

高糖系ウンシュウミカンの隔年結果の一因となる枝梢の形態

浅川将暁・稗園直史¹⁾・高原利雄¹⁾・奥田 均¹⁾・中島貞彦
 (佐賀県上場営農センター・¹⁾ 果樹研究所カンキツ研究部 (口之津))

Masaaki Asakawa, Naofumi Hiehata, Toshio Takahara, Hitoshi Okuda and Sadahiko Nakashima :
 The Shoot Morphology, One of the Factor of Biennial Bearing in Satsuma Mandarin 'Aoshima'

高糖系ウンシュウミカンは樹勢が強く、隔年結果性が強い。高糖系ウンシュウミカンの枝梢管理の資とするため、枝梢の形態別の着花性と、それらの基枝の形態について調査を行った。

1. 材料および方法

1) 試験1：2003年5月に果樹研究所内の12年生「青島温州」を用い、枝別に着花数調査を行った。結果母枝の角度は90~60°を「上向き」、60~30°を「斜め」、30°以下を「水平」の3段階に、基部径は3mm以上を「太」、3mm以下を「細」の2段階に分け、1樹から80枝ずつ4反復で調査した。その際有葉花については、1~4葉と5葉以上に分けた。

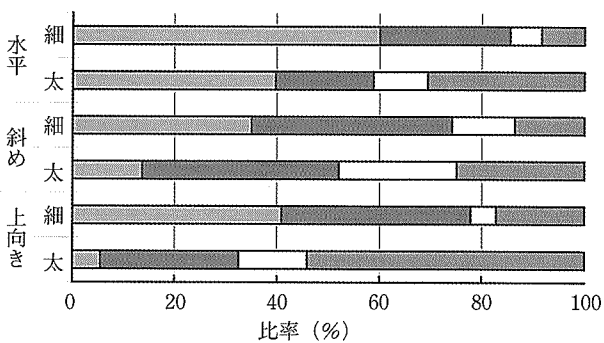
2) 試験2：2002, 2003年7月に試験1と同じ「青島温州」を用い、強枝梢は長さ30cm前後の長い発育枝、弱枝梢は10cm以下の短い発育枝とし、強枝梢・弱枝梢とその基枝の発生角度と種類を1樹から10枝ずつ、6反復で調査した。枝の角度については、90~60°を「角度3」、60~30°を「角度2」、30~0°を「角度1」、水平を「角度0」、0~-30°を「角度-1」の5段階に分けた。

2. 結果および考察

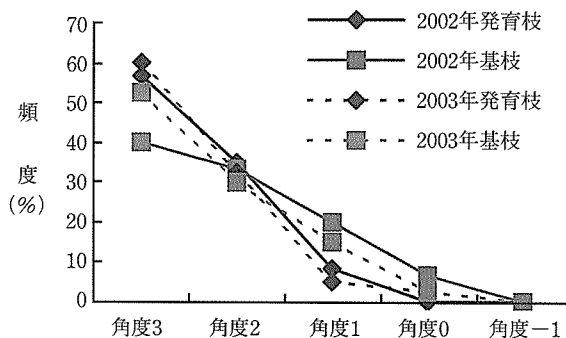
1) 試験1：上向きより水平に近い結果母枝ほど着花しやすい傾向がみられた。太い結果母枝より細い結果母枝が角度にかかわらず着花数が多かった。水平で細い結果母枝が最も着花数が多く、90%以上着花したのに対し、上向きの太い結果母枝は最も着花数が少なく、新梢の発生が半分以上を占めた(第1図)。

2) 試験2：強枝梢は太い基枝や長い基枝からの発生が多かった(データ略)。強枝梢は立ったものも多く、その基枝も立ったものも多くみられた(第2図)。逆に弱枝梢は、60°以上立ったものの割合は少なく、基枝の角度も水平に近いものが多かった(第3図)。基枝の種類をみると、強枝梢は有葉果の果梗枝からの発生が多く、弱枝梢は果梗枝以外からの発生が多かった(第4図)。

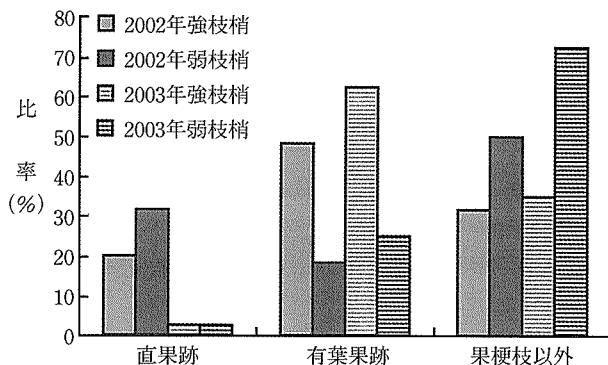
以上の結果から、強枝梢や有葉果の果梗枝は、着花しにくい強枝梢の発生する基枝となりやすく、隔年結果の一因になっていると考えられた。強枝梢の発生をおさえるため、上向きで果梗の太い有葉果の果実は、摘果の際に果梗枝ごと剪定鋏で切り落とすなどの対策が必要と考えられる。



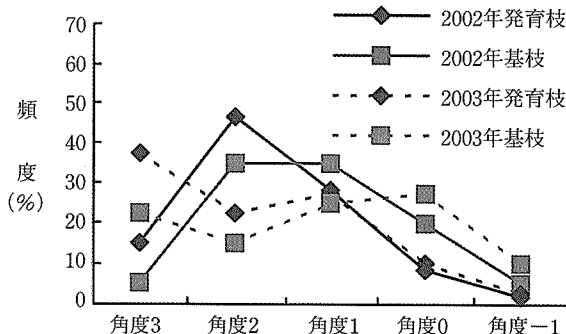
第1図 枝の向き、太さと着花数の関係



第2図 強枝梢と基枝の角度との関係



第4図 強枝梢の発生する基枝の種類



第3図 弱枝梢と基枝の角度との関係